

平成 29 年度全国公立大学学生大会 LINKtopos 2017 in Osaka 報告

平成 30 年 1 月

一般社団法人公立大学協会

LINKtopos 2017 を振り返って

「熱い10月」が過ぎていきました。写真の中の一人ひとりの顔を見ていると、今でもあの3日間が熱く蘇ってきます。全国から集まった公立大学の「若き志士」たちが、大会テーマの「Discover Ourselves ～地域と出逢い、私と出逢う～」にあるように、自らの志を見つめ、他大学の仲間たちのエネルギーに熱せられ、大きな成長を遂げて自分の大学に帰って行きました。それは私たちも同じで、3日間行動を共にしたワーキンググループの教員たちもまた、「こういう学生たちを指導できる教員は幸せだ」と語り合うほどに感動し、これからもLINKtoposの学生たちを支援していく想いを強くしました。

LINKtopos 2017は、大きく進化した大会になったと思っています。一つには、社会の現実の課題—大阪市が実際に抱えている地域課題をテーマに、学生たちの知識や経験をもとにその解決に向けての議論を深めていったことです。また、各大学で自分たちが取り組んでいる活動を語り情報交換する時間を設定したことで、学生間の交流がこれまで以上に活発になりました。

最も大きな変化は、次年度の大会の運営にあたる学生委員が、これまでの「推薦」ではなく、「立候補」で決まったことです。たくさんの学生たちが自ら手を上げたことは、LINKtoposが「自分事」になってきていることを表しています。「参加」するだけでなく、役割を担って「参画」する意志を持つ学生たちが増えてきたこと、これは大きな飛躍です。

自分の大学に帰ってから、大阪で得た熱を冷ますことなく、自分の学ぶ地域の課題をしっかり見据え、その解決に向けて仲間と力を合わせながら汗を流している姿を思い描いています。その中には、多くの困難を乗り越えて学内LINKtoposを立ち上げ、あるいは、地区ブロックLINKtoposの実施に向けて奔走している学生もいるはずです。彼らの熱い志が実を結んでいることを期待しながら、このような「若き志士」たちをご支援いただきますよう、公立大学のすべての教職員のみなさまにお願いいたします。

終わりにりましたが、LINKtopos 2017の開催にあたり、主会場を提供してくださった大阪市立大学長・荒川哲男先生、学生委員たちの想いを受け止め実現に向けてご支援くださった同大学学長補佐の宮野道雄先生と教職員のみなさまに厚く御礼申し上げます。

そして、LINKtopos 2017を企画し運営してくれた、代表の前田謙さんはじめ、学生委員のみなさまの健闘を称えます。

「ありがとう！ 私はみなさんと出会えて幸せです！ 本当に素晴らしい大会でした！」

公立大学の学生交流に関するワーキンググループ
主査 清原泰治（高知県立大学学長特別補佐）

LINKtopos 2017 in Osaka について

平成 29 年度の LINKtopos は、10 月 7 日（土）から 9 日（祝）にかけて、大阪府立少年自然の家及び大阪市立大学杉本キャンパスを会場に開催されました。

最終日の 10 月 9 日（祝）には、平成 29 年度第 1 回公立大学学長会議と連携して、ランチ交流、ポスターセッション、合同セッションが行われました。合同セッションでは、鷺田清一京都市立芸術大学長から地域で学ぶ公立大学生に対し応援メッセージが寄せられ、これに応える形で公立大学学生ネットワーク代表の前田謙さん（北九州市立大学 4 年）より大会報告がありました（表 1）。

表 1 LINKtopos 2017 in Osaka 活動概要

一日目 平成 29 年 10 月 7 日（土） 大阪府立少年自然の家
分科会 ・参加者の日ごらの活動内容に応じ、① 福祉／災害／防犯、② 地域活性、③ 学内協働の 3 つのグループのいずれかに分かれ、それぞれのグループ内でプレゼンテーション、意見交換
全体会 ・分科会での学びを共有
二日目 平成 29 年 10 月 8 日（日） 大阪市立大学 杉本キャンパス
地域課題解決型ワークショップ ・① 地域福祉、② 地域再生／活性、③ 公立大学の地域貢献、④ 防災（減災）教育／災害復興のテーマを設定し、参加者の希望に応じて 4 つのグループに区分 ・開催地の大阪市や大阪市立大学の職員らを講師として招き、テーマごとに講演を聴講 ・各グループ内でさらに複数の班に分かれてグループワークを行ったのち、ワールドカフェ、グループ内での発表を経て、グループ代表班が全体で発表し、講師による講評
三日目 平成 29 年 10 月 8 日（月・祝） 大阪市立大学 杉本キャンパス
ダイアログ① ・大学所在地ごとに 6 つのグループに分かれ、近隣大学間での振り返り、ネットワークの構築
ランチ交流会 ・全国の公立大学長らと学生大会参加学生らとの昼食会
ポスターセッション ・学生大会参加学生公立大学長へのポスターセッション
学長・学生合同セッション ・鷺田清一 京都市立芸術大学長講演「地域に向かって学ぶ公立大学生が羽ばたくために」 ・公立大学学生ネットワーク代表の前田謙さん（北九州市立大学文学部 4 年）より報告
ダイアログ②（クロージング） ・大学ごとに振り返り

公立大学協会では、第1委員会のもとに「公立大学の学生交流に関するワーキンググループ」を設置し、大会の企画・運営を支援しました（表2）。

表2 平成29年度 公立大学の学生交流に関するワーキンググループ 委員名簿

	所属・役職	氏名	備考
主 査	高知県立大学学長特別補佐 地域教育センター長	清原 泰治	平成27・28年度委員
副主査	名古屋市立大学 理事兼副学長	伊藤 恭彦	平成27・28年度委員
委 員	札幌医科大学 医療人育成センター長	相馬 仁	北海道・東北地区協議会議長 (第1委員会委員) 推薦
〃	首都大学東京 学長補佐(学生担当)	永井 徹	関東・甲信越地区協議会議長 (第1委員会委員) 推薦
〃	岐阜薬科大学副学長	足立 哲夫	東海・北陸地区協議会議長 (第1委員会副委員長) 推薦
〃	滋賀県立大学 地域連携担当理事	田端 克行	近畿地区協議会議長 (第1委員会委員) 推薦
〃	大阪市立大学学長補佐 地域連携センター所長	宮野 道雄	平成29年度第1回学長会議 開催校推薦
〃	下関市立大学 経済学部学長	高橋 和幸	中国・四国地区協議会議長 (第1委員会委員) 推薦
〃	熊本県立大学 総合管理学部教授	吉村 信明	九州・沖縄地区協議会議長 (第1委員会委員) 推薦
〃	公立大学協会事務局長	中田 晃	

次ページ以降に、公立大学学生ネットワーク作成の「LINKtopos 2017」報告書を付します。

LINKtopos 2017 in Osaka

〔平成 29 年度 全国公立大学学生大会〕

大会報告書

< 期日 >

平成 29 年 10 月 7 日(土)～9 日(月・祝)

< 会場 >

大阪府立少年自然の家

公立大学法人大阪市立大学 杉本キャンパス



公立大学学生ネットワーク

LINKtopos

【目次】

はじめに

0. 大会別参加者数推移と属性

1. 大会プログラム

2. 実践内容

2-1. 大会1日目について

2-1-1. 分科会 概要

2-1-2. ①福祉／災害／防犯

2-1-2. ②地域活性

2-1-2. ③学内協働

2-1-3. 事後アンケート結果／参加者の声

2-1-4. 総括

2-2. 大会2日目について

2-2-1. 地域課題解決型ワークショップ 概要

2-2-2. ①地域福祉

2-2-2. ②地域再生／活性

2-2-2. ③公立大学の地域貢献

2-2-2. ④防災（減災）教育／災害復興

2-2-3. 事後アンケート結果／参加者の声

2-2-4. 総括

2-3. 大会3日目について

2-3-1. ダイアログ①について

2-3-1-1. ダイアログ① 概要

2-3-1-2. 参加者の声

2-3-1-3. 総括

2-3-2. 学生・学長合同セッション及びランチ交流会について

2-3-2-1. 学生・学長合同セッション及びランチ交流会 概要

2-3-2-2. 学生・学長合同シンポジウムについて

2-3-2-3. 事後アンケート結果／参加者の声

2-3-2-4. 総括

- 2-3-3. ダイアログ②について
 - 2-3-3-1. ダイアログ② 概要
 - 2-3-3-2. 参加者の声
 - 2-3-3-3. 総括

3. 大会全体を通して

- 3-1. LINKtopos 2017 総合アンケート結果／参加者の声
- 3-2. 全体総括

4. 次年度開催に向けて

- 4-1. LINKtopos 2018 学生委員組織体制
- 4-2. 学内 LINKtopos／地区別 LINKtopos の開催に向けて
- 4-3. 展望

5. 謝辞

補足資料①

平成 29 年度「公立大学の学生交流に関するワーキンググループ」について

補足資料②

LINKtopos 2017 学生委員について

はじめに

教育基本法には、大学の役割として「教育」「研究」「社会貢献」が明記されており、この中の社会貢献については地域貢献に関する事業が各大学でよく取り上げられ、話題にされている。

公立大学は、地方自治体によって設置されていることから、大学が設置されている地域社会における知的・文化的拠点として中心的な役割を担っており、なかでも地域貢献が重要課題として大切にされてきた。また、人口減少と少子高齢化が急速に進展していくことが予想される将来に対し、社会・経済・文化・産業・医療・福祉等における諸課題に果敢に取り組むことが期待されている。

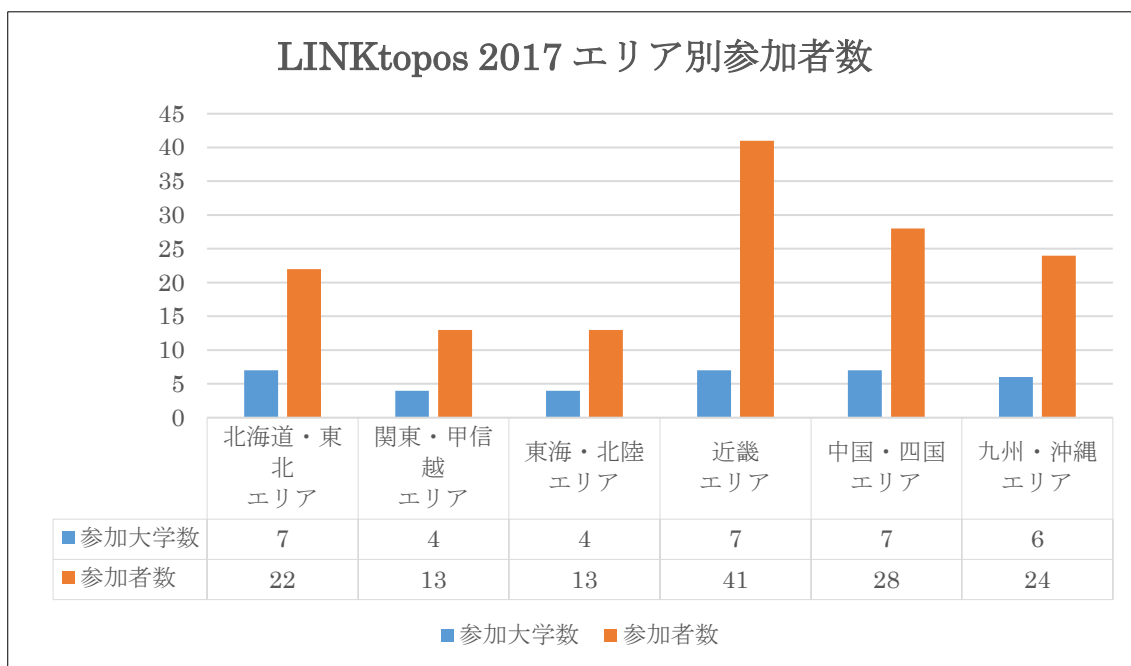
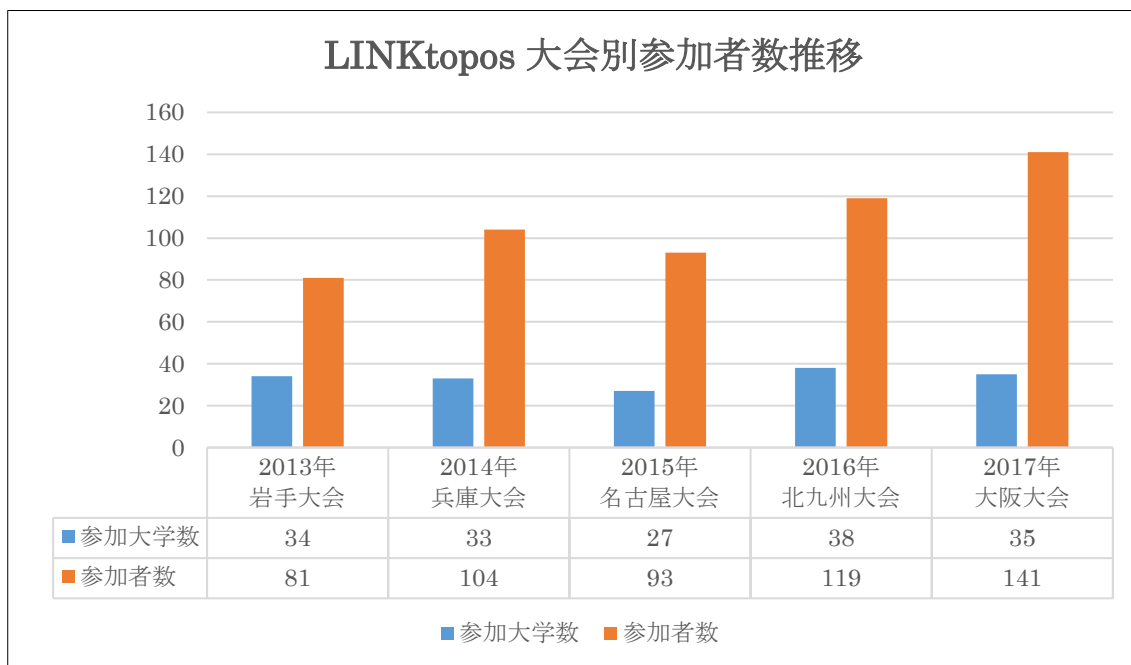
全国の公立大学の学生で組織された公立大学学生ネットワークをベースにして、平成 25 年度から「全国公立大学学生大会 LINK topos」が開催されてきた。この学生大会には、各大学で様々な地域貢献活動に取り組んでいる学生が参加し、各大学の地域貢献活動の事例や地域の知の拠点としての公立大学の役割についての情報交換を行い、そのあるべき姿について議論されてきた。平成 26 年度の大会からは学生だけでなく、教職員にも参加を呼びかけ、学生・教員・職員が、地域貢献活動やその課題について共に議論することによって、相互の理解や交流を深めてきた。

本報告書は、平成 29 年 10 月に開催された「LINKtopos 2017 in Osaka」についての概要を「LINKtopos 2017 当日学生委員」による分担執筆にてまとめたものであり、今大会への参加を機に所属大学や所属団体での活動において、更なる飛躍を見据えた行動につなげるための指針にも触れている。

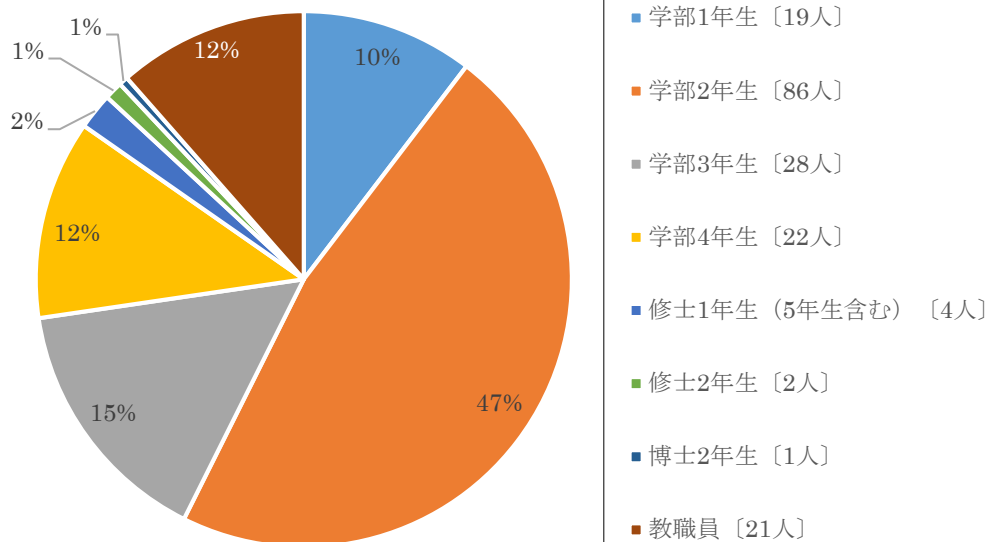
平成 29 年度 公立大学学生ネットワーク 代表 前田 謙(北九州市立大学 文学部 4 年)



0. 大会別参加者数推移と属性

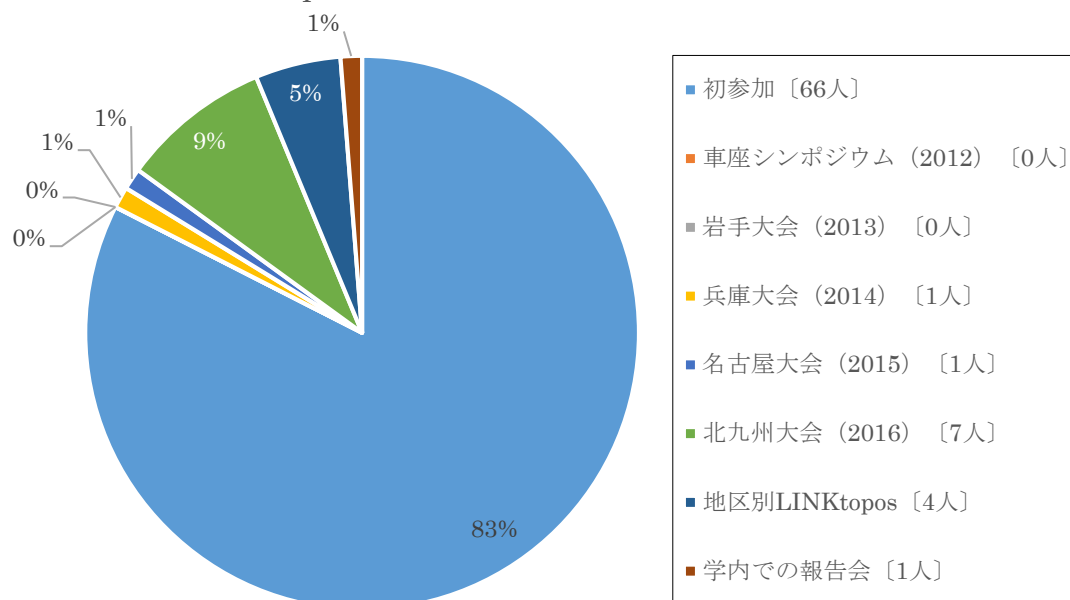


LINKtopos 2017 参加者属性【N=141】



LINKtopos への参加経験【N=75】

(「LINKtopos 2017 参加者事前アンケート」より抜粋。)



1. 大会プログラム

<大会1日目> ～「私たちって、いつも何やってるんだっけ!？」～

- 15:00～15:45 入所式/チェックイン【45min】
- 15:45～17:45 分科会【120min】
- 18:00～19:00 夕食【60min】
- 19:00～20:00 分科会 全体共有【60min】
- 20:00～21:00 入浴【60min】
- 21:00～ 自由時間/就寝

<大会2日目> ～「私たちが、出来ることって何だろう!？」～

- 07:00～07:30 朝食【30min】
- 07:45～08:45 移動【60min】
- 09:00～09:30 メニュー紹介【30min】
- 09:30～10:10 A. 学びの時間【40min】
- 10:10～12:00 B. 地域課題解決ワーク①【110min】
- 12:00～13:00 昼食【60min】
- 13:00～17:00 地域課題解決ワーク②（※途中、ワールドカフェあり。）【240min】
- 17:00～18:30 発表（グループ代表選出 ⇒ 全体発表）【90min】
- 18:45～19:30 夕食【45min】
- 19:30～20:30 移動【60min】
- 21:00～22:00 入浴【60min】
- 22:00～ 自由時間/就寝

<大会3日目> ～「私たちは、どこへ歩いていくべきなんだろう!？」～

- 07:30～08:30 朝食【60min】
- 09:00～10:00 宿舎退所/移動【60min】
- 10:00～11:00 ダイアログ①〔エリア別（隣接大学間）〕【60min】
- 11:15～11:30 ポスターセッション会場準備【15min】
- 11:30～12:15 ポスターセッション【45min】
- 12:15～13:15 ランチ交流【60min】
- 13:15～14:50 学長セッション【95min】
- 15:00～15:15 ダイアログ②〔大学ごとに〕【15min】
- 15:30～15:45 クロージング（※集合写真撮影 含む。）【15min】

2. 実践内容

2-1. 大会 1 日目について

2-1-1. 分科会 概要

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4 年 前田 謙】

○プログラム設定の背景

昨年度大会までの参加者の声から、「他大学の活動紹介をもっと知りたかった。」「時間が足りなかった。」という旨の反応が多く挙がっていた。そのため、今年度の大会では、参加者事前アンケートを採用し、学生委員が事前に参加者が活動している分野や活動内容をある程度把握したうえで、分科会を設定した。

この分科会では、参加者の活動を「①福祉／災害／防犯」「②地域活性」「③学内協働」という 3 つのジャンルに分け、それぞれの活動をプレゼンテーション形式で発表してもらった。

なお、前述の 3 テーマの選定は、「公立大学の特性」や「LINKtopos の成り立ち」のほか、参加者が日頃から実践している地域活動内容を考慮して行った。

○目的・意図

1. 参加他大学の活動を知り、学ぶ。
2. 類似した活動を実践する参加者と議論の場を持つことで、参加者同士のネットワーク形成を促進する。

○手法

- ・参加者数及び参加団体の数を考慮し、事前に学生委員によって、各分科会あたり 10 団体前後を目安にグルーピングを行う。
- ・当日学生委員が分科会のファシリテーターとして、分科会の進行を担う。
- ・参加者は、事前に準備したプレゼンテーション資料を基に、1 団体あたり 5 分～10 分程度で発表を行なう。

○取り組みの詳細

各分科会での実践内容については、以下、2-1-2において、担当ファシリテーターとなった学生委員がそれぞれ記述する。

2-1-2. ①福祉／災害／防犯

【LINKtopos 2017 学生委員 青森県立保健大学 健康科学部 3年 常岡恵里奈】

○概要

福祉・災害・防犯に関する活動を行う各大学・団体が集まり、プロジェクターやポスターを用いて5分程度で日頃の活動を発表し、質疑応答を行った。その後、活動内容が同じ分野団体でグループに分かれ、活動内容や課題をそれぞれ共有した。

○成果

各大学の活動を知ること、似ているテーマで活動していてもその対象者や、アプローチの仕方が異なり、地域差があることが分かった。「地域が抱えている課題は医療者不足」といったほかの地域でも当てはまるものや、その地域特有の課題もあり、他大学の学生や地域住民の協力を得ながら活動している団体も多かった。参加者への事後アンケートでは、「他の大学での活動を聞くことができ、有意義な時間だった。」「自分の専門でない活動や似たような活動、多くの活動について知ることができてとても参考になった。」などといった意見があり、他の団体の活動内容を知ることによって自分たちの活動を再確認できた参加者も多かったようだ。

また、分科会がLINKtoposの最初のプログラムということもあり、名前を覚えるきっかけや、参加者同士の話題になったようだ。短い時間ではあったが、それぞれの取り組みを知ることにより、参加者同士の交流を深めることができた。3日間のLINKtoposを盛り上げる良い土台になったと思う。

○課題

プロジェクターの設置に時間がかかり、分科会のテーマについて話し合う時間を十分に確保できなかった。参加者からも、時間が足りなかったという意見もあり、時間配分の見直しは今後の課題である。また、各団体の活動をまとめた資料が手元があれば、より理解を深められると思った。



2-1-2. ②地域活性

【LINKtopos 2017 学生委員 大阪市立大学 法学部 4年 上田光希】

○概要

当分科会には、広く地域活性に取り組む学生団体やゼミナールの学生、地域活性の教育プログラムを受ける学生、20団体52名が参加した。プロジェクターを用いて、1団体あたり3分の発表といくつかの質疑応答をするという方式で実施した。

○成果

地域活性といっても、大学近辺の住民と共に地域で活動を行う団体もあれば、地域志向教育プログラムで様々な地域の現場で学習している団体、投票を呼びかける活動をするゼミナールなどもあり、多種多様な活動が報告された。これにより、地域活性には様々なアプローチが存在することを認識することにつながった。また、他大学の活動に刺激を受けて、自らの団体の活動にも生かしたいという声もあった。

○課題

前述したように、「地域活性」というテーマが含む領域は広く、地域活性について取り組む団体が多いため、当初はソフト面で地域活性に取り組む団体の分科会とハード面で地域活性に取り組む団体の分科会に分ける予定であった。しかし、当日になってプロジェクターの台数が不足することが発覚したため、両者を統合せざるを得なくなってしまった。従って、各団体の発表が当初予定より2分も短い3分となってしまう、非常に窮屈なスケジュールとなってしまった。さらに悪いことには、予定時間内に全ての団体の発表が終わらず、一部の団体には夕食を挟んでから発表していただくことになり、分科会としての議論は全くできない事態に陥ってしまった。以上より、事前の機材の確認は入念にすることが肝要である。

また、発表時間に限りがあり、詳細はポスターにて説明するという団体が多かったが、今年度のポスターセッションは分科会の翌々日に行ったため、間延びしてしまった。よって、分科会とポスターセッションは一体で行う方が良かった。



2-1-2. ③学内協働

【LINKtopos 2017 学生委員 首都大学東京 システムデザイン研究科 修士1年 水越智一】

○概要

「学内協働」の分科会には、岩手県立大学・埼玉県立大学・首都大学東京・新潟県立看護大学・富山県立大学・大阪府立大学・高知県立大学・北九州市立大学・長崎県立大学の学生及び教職員が参加した。大学内における団体間の関係強化や、学生団体ではなく大学名を背負った活動などが紹介された。

具体的には学内 LINKtopos の活動や大学ボランティアセンターの活動、ボランティアコーディネート活動（ボランティアしたい人とボランティアされたい人をマッチングする活動）、さらには大学広報の活動が紹介された。

○成果

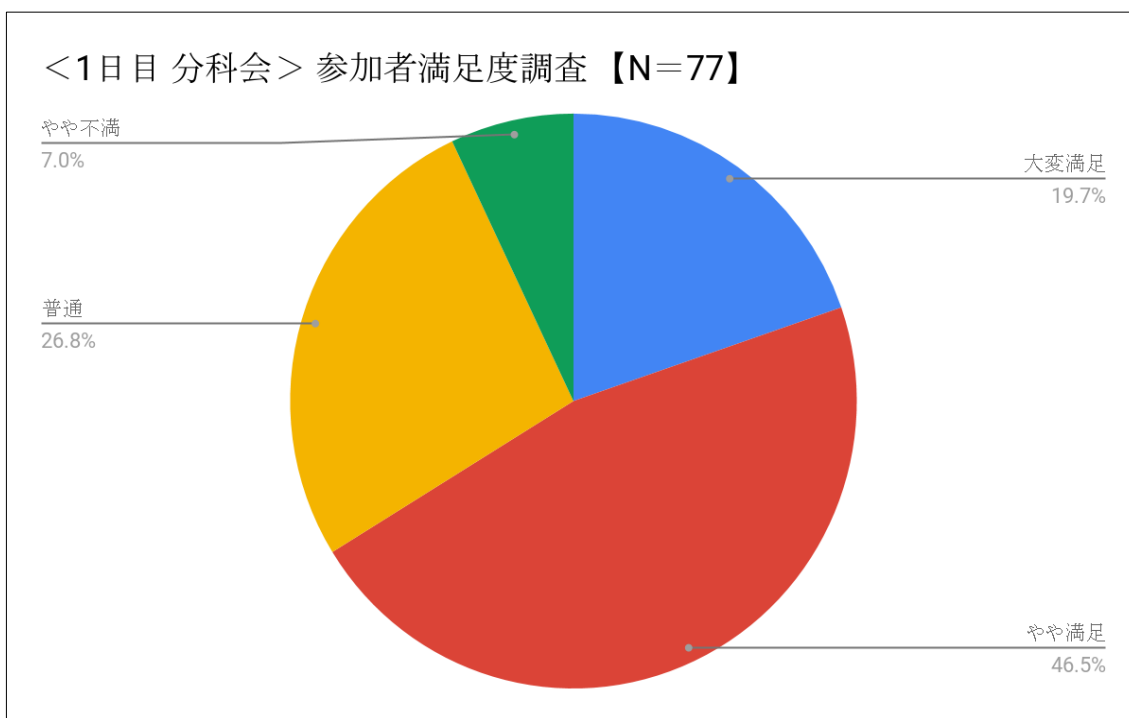
具体的な活動内容は異なるが、それぞれの団体や個人が抱えている課題点について類似した活動をしている学生からのアドバイスや意見交換が個別に行われた。また、他大学の独特な活動を知ることで刺激になったという声があった。

○課題

各団体に用意できた発表時間が5分程度と短くなってしまい、また団体が入れ替わる際の時間のロスが大きくなってしまった。また、アドバイスや意見交換の時間を分科会として確保することができなかった。プロジェクター機器も経年劣化のせい、投影される色が若干、紫がかってしまっていたため、事前に参加者に準備していただいた資料が見づらくなってしまった。



2-1-3. 事後アンケート結果／参加者の声



○参加者の声（一部抜粋）

・PCとプロジェクターの調子があまり良くないみたいでした。進行や各団体の発表時間については非常に良かったと思います。
・自分の所属している団体について全国に対して話せる機会は減多にないので貴重な体験ができた。
・発表環境を事前に整えていただけると嬉しいです。準備していた内容を十分に発表できなかったことが残念でした。
・他大学の活動内容について事例として知識を得ることが最初にできたのはとても良かった。話のネタにすることができました。
・普段は他の大学の活動内容を知る機会がほとんどないので、こうした情報共有は参考になりました。また、発表時間が短く簡潔にまとめられているので、要点だけを知ることができる点も良かったです。
・他大学の発表は新鮮で興味深いものが多く、参考になった部分が多かったですが、もう少し一つの発表の時間をとっていただけると、より深く繋がっていけるような機会になったように思いました。
・どうしてもあの時間で発表するには短かった。ポスターセッションでも活動紹介をするので、最初に交流もかねて、ポスターセッションでの活動紹介をしてほしかったなと思った。

<ul style="list-style-type: none"> ・活動紹介をポスターセッションにしたらいいと思います。学生は3日目のポスターセッションでなかなか他団体のことを知れなかったので、ポスターセッションで気になる団体をもう少し見つけたかったと思いました。
<ul style="list-style-type: none"> ・ひとくちに大学生の地域貢献といっても、（それぞれの地域が抱える課題や学生の得意分野に合わせてということになるが、）様々なアプローチが存在することがわかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールが詰め詰めだったことと、パワーポイントのバージョンが結構前なのでパソコンが重かったことで時間がかかったことが、発表者の方々の準備していたものができなかつたと思います。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の専門でない活動や似たような活動、多くの活動について知ることができてとても参考になった。また、自分はたまたま全体で発表したのですが、みんなに名前を覚えてもらえる機会になり、また少し緊張する場でのプレゼンなり良い経験になりました。ただ、前もってみなさんの名前や情報などある程度把握していた状態でプレゼンを聞いた方がより理解がしやすかったと感じました。

2-1-4. 総括

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4年 前田 謙】

今大会では、「参加者の日頃の活動を全国からの参加者にアピールしてもらい、大会終了後活動に活かすことが出来る素材を持ち帰ってもらいたい」という想いを込めて、初めて分科会形式を採用した。

しかし、この方法を採用した結果、様々な不都合が生じ、この分科会のために丹念に資料作成をしていただいた参加者にとっては、不完全燃焼なままのプログラム進行であると感じさせてしまった。端的に言えば成功とは評価しがたい。具体的には、施設利用の観点や事前準備（機器貸与の詳細な打ち合わせなど）が不十分であったことから、本来の狙いである「参加者の活動をアピールしてもらおう」という事項が達成できなかった。

また、「参加者事後アンケート」への回答のなかにも、「1日目の時点で、ポスターセッション用の資料を用いて1度発表をしておきたかった」という旨の記述が複数寄せられていた。発表を行う学生の大半が、ポスターセッション形式での活動報告／紹介の経験がほとんどないため、やはり例年通り、1日目の「参加者同士の活動紹介」時点でポスターセッションを実施することが好ましいのではないかと考える。ただし、1大学（団体）あたりの発表時間には限りがあるため、時間配分や発表方法については工夫が必要である。

2-2. 大会2日目について

2-2-1. 地域課題解決型ワークショップ 概要

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部4年 前田 謙】

○プログラム設定の背景

例年、LINKtopos の醍醐味ともいえるワークショップは、文字通り、「参加者の熱量が最も高まるプログラム」として意義づけられている。しかしながら、近年、このワークショップにおけるプロセスやアウトプットがどこか宙に浮いたようなモノになりつつあることに、関係者から疑念の声があがり始めていた。

そのため、今大会においては、開催地・大阪の地域課題にフォーカスし、よりリアルで現実味のある解決策を練ることを主題に掲げ、「地域課題解決ワーク」として実施した。大阪市住吉区の社会福祉協議会、大阪市役所、及び大阪市立大学の教職員の方々を話題提供者として招いたほか、ワークショップ自体も、複数ファシリテーターによる進行を採用した。

○目的・意図

1. 開催地（大阪）の地域課題に対するアプローチを試みるとともに参加者自身の活動フィールドにおける相違点を探る。
2. バックグラウンドの異なる参加者とともに、やや抽象的な地域課題に対峙することで、多様な考え方やアプローチ等を学ぶ。

○手法

予め学生委員が設定した以下の4つのジャンルに沿って、参加者自身の興味・関心に応じてグルーピングを行ない、「話題提供者」から提示される地域課題の解決に対して議論を深める。なお、地域課題解決の1つの手法として近年多くの地方自治体でも援用されているSWOT分析を採用した。

①地域福祉 <話題提供者：中嶋千晴 様（大阪市住吉区社会福祉協議会 地域支援担当）>

テーマ：「地域のSOS」をどう早くキャッチするか、あるいは「それを拒否する人」にどう近づくか。

②地域再生／活性 <話題提供者：伊東義博 様（大阪市市民局区政支援室 地域政策担当）>

テーマ：地域コミュニティ形成／維持の方策。

③公立大学の地域貢献 <話題提供者：澤田弥生 様（大阪市立大学 社会連携課）>

テーマ：大阪市立大学として「地域社会への貢献」についての公教育の取り組み。

④防災（減災）教育／災害復興 <話題提供者：林久善 様（大阪市立大学 社会連携課）>

テーマ：指定避難所としての公立大学の役割とは。

○取り組みの詳細

各テーマでの実践内容については、以下、担当ファシリテーターとなった学生委員が記述する。

2-2-2. ①地域福祉

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 地域創生学群 4年 大庭亜美】

○概要

大阪市住吉区社会福祉協議会地域担当の中畷千晴様を講師にお招きし、今の住吉区の現状と課題をお話いただいた。「地域のSOS」をどう早くキャッチするか、あるいは「それを拒否する人」にどう近づくか。「高齢者」の孤独死や孤立を防ぐため、「要支援者」や「引きこもり」や「家庭内ホームレス」の発見のために学生（大学）と行政が取り組むべき課題と、その解決策の模索・提案を行った。

○成果

どのグループもそれぞれオリジナリティのある内容でアイデアを出し、学生だからこそ考えられる視点での提案を行った。今回は、住吉区の課題をテーマにそれぞれの班でアイデアを出したが、この課題は住吉区だけでなく、全国共通して起こっている課題であるため、それぞれの地域に戻って還元が出来るようなアイデアがたくさん出てきた。中畷さんの講評でも「大人の考えではなく、柔軟な学生の意見を聞くことができたので、今後の参考にしたい。」という前向きな意見をいただくことができた。

○課題

私が現在行っている地域活動が地域福祉の分野であれば、中畷様のお話を聞いただけで内容がスッと頭に入ってくるが、興味はあるけれども、全く活動は行っていない学生にとっては、少し内容が難しかったように感じる。また、SWOT分析で皆苦戦しており、ファシリテーター側も上手くアドバイスをする事が難しく、理解を深めることがあまりできなかったように感じる。



2-2-2. ②地域再生／活性

【LINKtopos 2017 学生委員 高知県立大学 文化学部 4年 島野真帆】

○概要

大阪市役所市民局区政支援室の伊東義博様を講師にお招きし、都心部における地域コミュニティの活性化についてという題目で、現在の大阪市の政策についてお話いただいた。市の概要から、市民の意識、活躍する市民活動団体の有無、また市の地域政策を具体的にインプットした上で、「地域コミュニティ形成／維持の方策」また、「そもそも地域コミュニティの形成は必要なのか、必要だとすれば具体的にはどんなケースなのか」といった観点で、学生(大学)と行政が取り組むべき課題と、その解決策の模索・提案を行った。

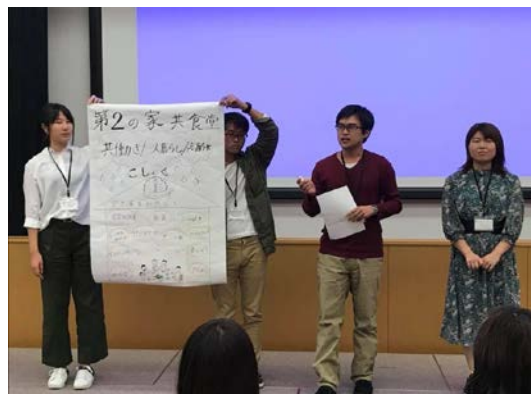
○成果

詳しいインプットがあったおかげか、アウトプット物も、より「大阪市」が何を課題として抱えていて、今後どうあるべきかによったものになっていたと思う。参加者の声でも、「今現在、大阪が抱えている人口減少、過密、少子高齢化についての問題についての話を聞いた。自分たちでそれらについての対策を立案するという、普段には少ない、いい機会になった。」「実際に専門家の方の話を聞くことができ、貴重な経験をすることができたとともに、解決策を考える良い材料になり、良かったと思います。」などがあり、より具体的な議論ができていた。

○課題

各グループで意図的に学年をばらつかせていたこともあり、SWOT分析における理解度に差があったため、グループにおいては何を課題としてとらえたらいいのか、また「地域活性」をどう定義づけし、課題に向かっていったらいいか苦戦しているところが見受けられた。どう定義づけするかも、何か課題としてとらえるかも参加者に委ねているワーク設計であったため、ファシリテーターの細かいケアが必要とされる。

次回からは、全体ファシリだけでなく、サブファシリの養成にも注力していく必要がある。



2-2-2. ③公立大学の地域貢献

【LINKtopos 2017 学生委員 首都大学東京 システムデザイン研究科 修士1年 水越智一】

○概要

前半を大阪市立大学 社会連携課担当係長 澤田弥生様より、後半を大阪市立大学 都市研究プラザ教授 水内俊雄先生よりお話をいただいた。澤田様からは、グループメンバーで考案する「公立大学としての地域への自主的な取り組みやカリキュラム上の取り組み」を、指定された4つの項目に基づいて説明できる、理由付けをするように指示が出された。項目は、①伝えたいアドバンテージ、秘訣はなにか ②ヒト・モノ・カネ・コト+エビデンスで整理すること ③どのようなアウトプット、アウトカムが出ているのか ④評価や課題を相互にどう認識しているか の4つである。水内先生からはその具体例の紹介として大阪市立大学のコミュニティ再生副専攻についての説明がなされた。

○成果

グループのメンバーが北から南まで分散した地域で、専攻分野も混合にしたため多岐に渡る案がなされた。本テーマが漠然としているためそれを逆手に取り様々な角度、入口から地域への貢献方法を考案したようだ。具体的には「専門外の知識が欲しい人と専門知識を活かしたい人とのマッチング」案、「サツマイモ掘りを通した学生の地域学習」案、「地域住民が自らの地域の魅力に気付くことができるようなきっかけ作り」案などがあつた。

○課題

テーマそのものが漠然としていたため、まず自分たちはどの課題を解決すればいいのかを決定することに苦戦しているグループが多々あつた。また、最初にSWOT分析を行ったが、SWOT分析の経験のある参加者が少なかったことに加え、事前に予想されていた通りマイナス要因を考えるのに苦労しているグループが多いようだった。さらにグループ内での地域を分散させたことにより、グループのメンバーが考えている課題点と合致しないという様子も見受けられた。

ファシリテーターとしては、事前に自分でアクションを考えた上でどのようなアドバイスが必要か考察すべきだった。また、ファシリテーションの手法について勉強が必要である。



2-2-2. ④防災（減災）教育／災害復興

【LINKtopos 2017 学生委員 大阪市立大学 法学部 4年 上田光希】

○概要

本テーマのワークショップには、23名の学部生・1名の院生・1名の職員、合計25名が参加し、5つのグループに分かれた。話題提供は、「指定避難所としての公立大学の役割とは」というテーマで、大阪市立大学 大学運営本部社会連携課課長の林久善様にお話いただいた。林様からは、大阪市で起こりうる災害の特徴及び大阪市立大学における地域防災への取り組みについてお話ししていただいた。林様のお話は、指定避難所としての大阪市立大学の役割というよりも、広く大阪市立大学の防災への取り組みについてであったため、本グループのワークショップのテーマを「公立大学としての地域防災への取り組み」というよりやや広いテーマに変更した上で、議論を進めてもらった。

○成果

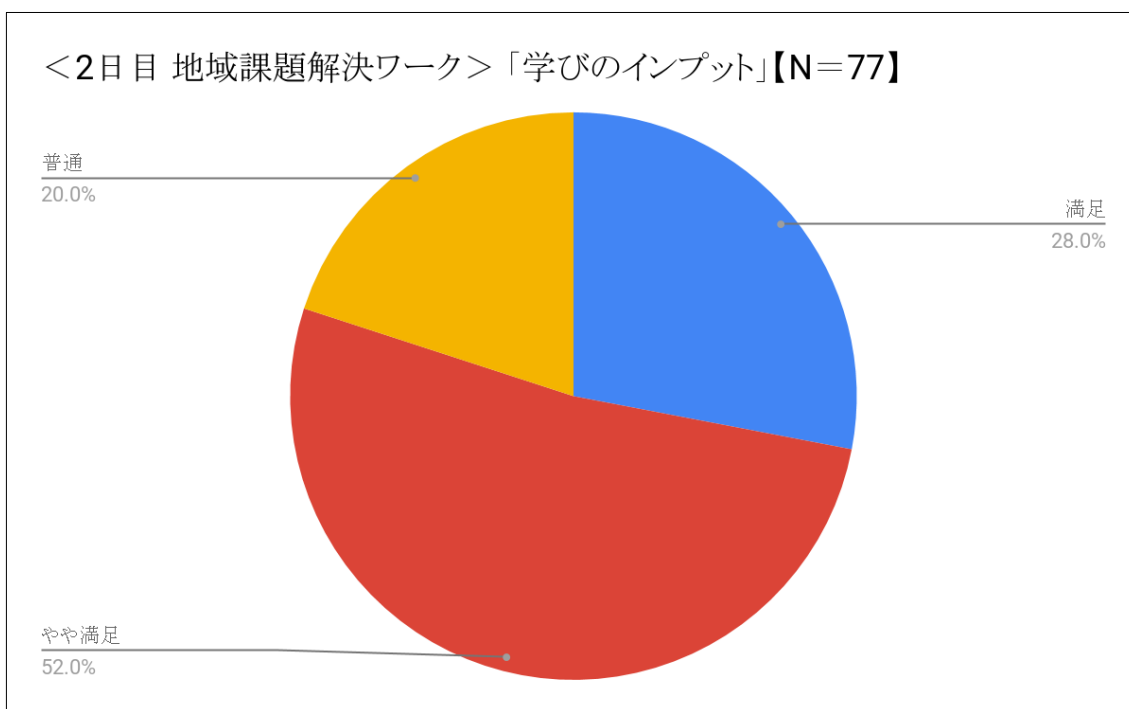
各グループ内に、それぞれの大学において防災活動を行なっている学生も、そうでない学生も混ざりあっていたことで、柔軟な発想による議論がなされた。SWOT分析の段階では、どのような災害を想定するのか、どのような課題設定するのかということで議論が行き詰まるグループもあったが、最終的には、いずれのグループも防災意識を喚起することを目標に方策が提言された。具体的には、お好み焼きの調理を通して地域のつながりを強めるという企画や、防災をテーマにしたカフェの運営、防災を学習するキャンプの開催、防災意識を高めるキャッチフレーズの考案という方策が提言された。

○課題

事前に用意していたテーマから変更したため、参加者を惑わせてしまうこととなった。加えて、テーマの変更をしたものの、話題提供いただいた内容と各グループの議論及び提言があまり関連しないということにも陥った。これらが生じた要因は、話題提供者との事前の打ち合わせの不足に他ならない。なお、本テーマにおいて、私はファシリテーターとして最低限の指示をするのみで、各グループの議論への介入は極力しなかったため、参加者にとってはこの手法が妥当であったかどうか不安である。



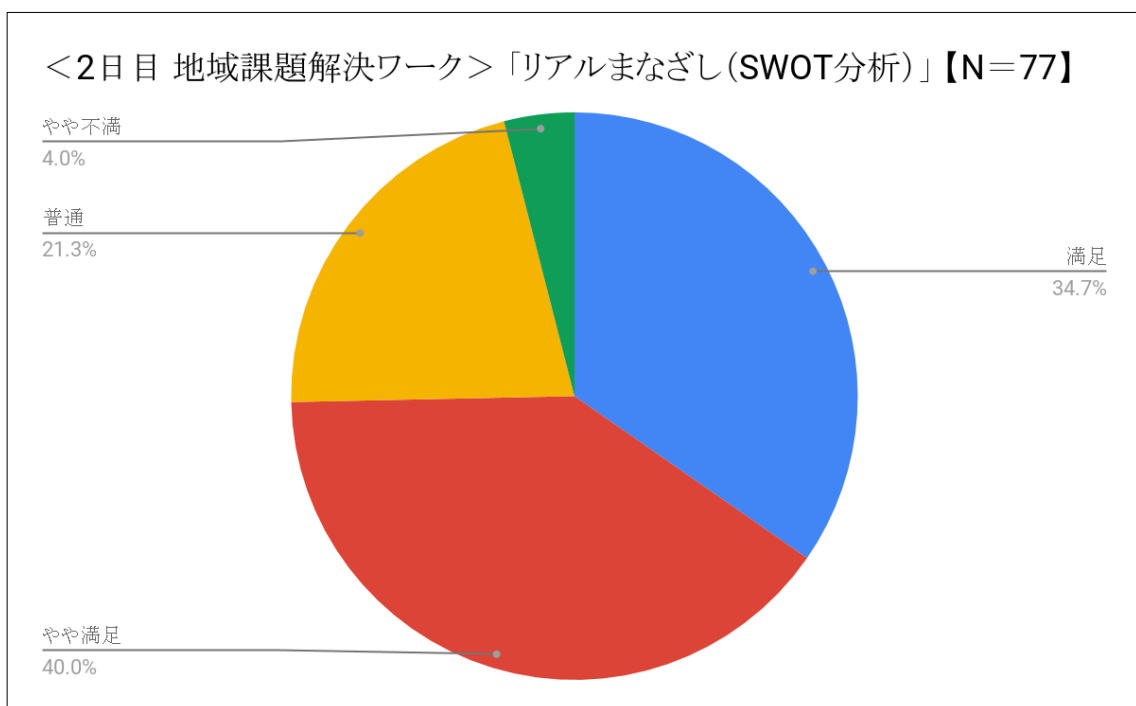
2-2-3. 事後アンケート結果／参加者の声



○「学びのインプット」に関する参加者の声(一部抜粋)

・ プロの方のお話を聞ける機会は多くなく、貴重な体験だったと思います。個人的には卒論のテーマに関わる内容でもあり、興味を持って聞くことができたと思います。学生の(ざっくりとした)関心でグループ分けしたのも良かったのではないかと思います。
・ 専門家の方のお話ということもあり、予備知識が無いと理解出来ない部分が多かったです。LINKtopos 開催前に自分が受ける講義の分野が分かれば事前に予習できるので、もう少し深い議論ができたと思います。
・ 今まで公立大学生としての課題を知る機会がなかったので、それを知れてよかった。
・ イメージでは課題をひとつ提示されて、各グループで話し合うという感じだった。話の中で学ぶことは多かったが、そのあとのグループワークに繋げることを考えると少し考えにくいこともあった。
・ 自分は地方の出身で都会の現状を把握出来ておらずなかなか難しかったが、いろんなアプローチを聞いてよかった。
・ 実際に専門家の方の話を聞くことができ、貴重な経験をすることができたとともに、解決策を考える良い材料になり、良かったと思います。
・ 大阪の現在の問題を細かく説明して下さり、自分の地域との相違点を発見できました。
・ 専門家の方からリアルなお話をしていただいた直後だと、ワークショップがスムーズでした。

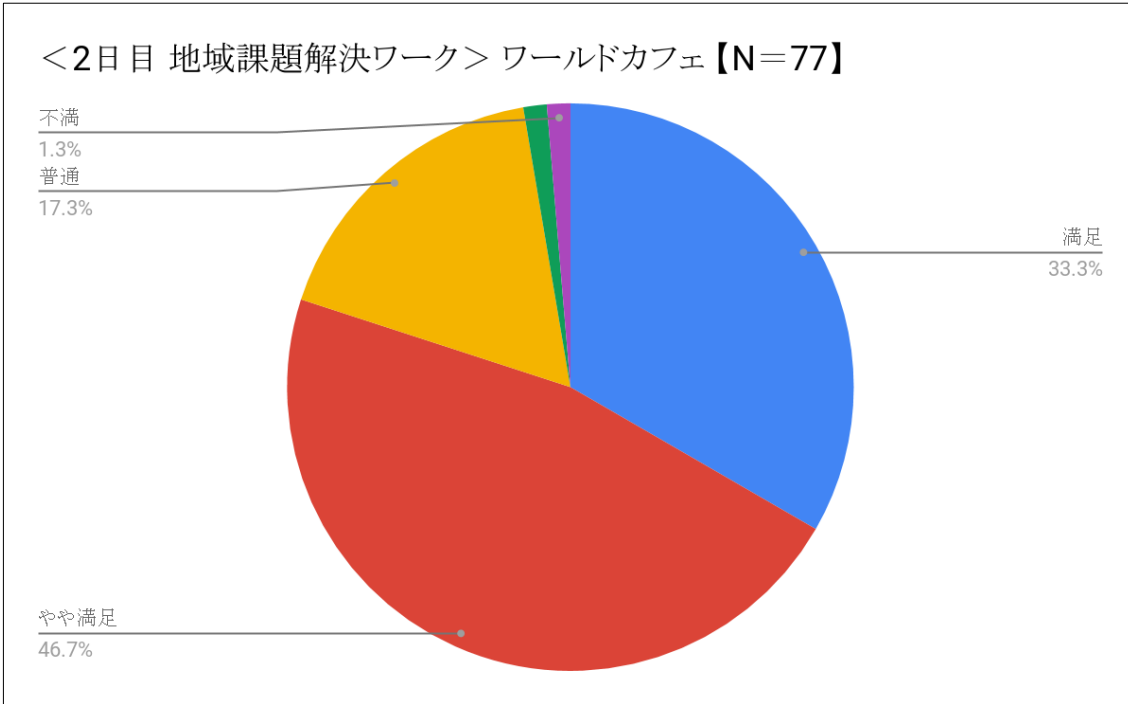
<ul style="list-style-type: none"> ・お話自体は良かったのですが、あまりその後のワークショップとつながらなかったような気がします。
<ul style="list-style-type: none"> ・住んでいない地域の話聞くことで、現在住んでいる地域の課題点の相違がみつけられた。
<ul style="list-style-type: none"> ・インプットは非常に有意義であったが、その後のアウトプットへの繋げ方が難しかったと思う。地域をどう捉えるかにもよるが、開催地に関するインプットだったため、大阪の地域課題解決を進めるのか、あくまで事例であったのか、何に向けてアウトプットすれば良いかが捉えづらかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・現場の方の声を聞くことができたので、より現実的なイメージを抱くことができました。
<ul style="list-style-type: none"> ・実際の現場で起きている課題を、専門家の方から聴くことができ非常に興味深かった。自分の気になる所を直接質問できたのが良かった。
<ul style="list-style-type: none"> ・今現在、大阪が抱えている人口減少、過密、少子高齢化についての問題についての話を聞いた。自分たちでそれらについての対策を立案するという、普段には少ない、いい機会になった。
<ul style="list-style-type: none"> ・普段自分の住んでいる兵庫県の防災は学んでいるけど、大阪の事例を知ったのは初めてでした。地区ごとに予想される被害も全く違うということもよく分かって勉強になりました。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の住んでいる地域とは別の特性を持つ地域の話や課題を聞くことができ、学びになった。
<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業後、どのような地域に関わっていくかはわからないが、大阪市内といった身近であるようで、遠かった実情を知ることができ、地域によって抱える問題は、共通点はあっても解決方法や規模が異なるということが知れてよかった。



○「リアルへのまなざし(SWOT 分析)」に関する参加者の声(一部抜粋)

<p>・全国様々な実情を抱える地域から集まった学生の意見交流は刺激的でした。ただ、他班の方の話を知っていると必ずしも SWOT 分析が最適だとは限らないような気もしました。</p>
<p>・参加者へ「今、何を話し合えばいいのか」という指示を丁寧に出すと良いと思いました。長時間のワーク、SWOT 分析という初めての作業であることから、何をすればよいか分からず困惑している学生がいました。</p>
<p>・SWOT 分析の提示がありましたが、テーマの提示があったので分析方法まで出さなくても良かったかなと思います。グループ次第では慣れてなく難しかったかもしれません。ただ、最後にはどの班も面白い案にたどり着いていましたし、参考となる案ばかりだったので、話の内容自体には満足しています。</p>
<p>・SWOT 分析は本来分析対象の立場がはっきりしているものに利用することで役立つツールなので、公立大学という抽象的なものに適用することはなかなか難しいと思いました。どこか一つの大学を事例として取り上げるなら、もう少し分析精度が上がったと思います。</p>
<p>・初めて会う人達とチームを作ることで、普段思いつきもしないような発想を学んだり、自分でも考えたりできてすごく新鮮でした。</p>
<p>・どのグループも知らない地域の課題を想像に任せて考えざるをえなかったもので、2日目の大半の時間を割いた割には、地に足のついていない企画提案しかできず成果が少なかったように思われる。他者と協同して企画を成就させるという趣旨はよいと思うが、どうせなら企画内容の充実も追い求めたいので、分析する対象の地域の課題を大会前から下調べした上で臨めるような工夫が必要である。</p>
<p>・他学部、他学科、他学年という多様なバックグラウンドのみんなとできてよかった。ただ、この前に大阪についてのお話を聞いているのでそれに関連させたらもっと大阪でやる意義があるのではないかな。</p>
<p>・与えられた課題が、実際どのようなものなのか、具体的に分析することができて良かったと思います。</p>
<p>・SWOT 分析ですが、私自身は少し触れたことがあったのでイメージをつかむことができましたが、全く触れたことのない人にとっては難しかったのではないかと感じました。</p>
<p>・初めて SWOT 分析をしたが、問題の原因を考えるための方法としてとても分かりやすかった。深く考えることができた。</p>
<p>・分析の利用し、同じ指標を持った上での課題解決は良かった。学部一年生など初めての人も多かったので、SWOT 分析についてももう少し説明するか、例を提示する必要があったと思う。何に対して分析を行っているか把握出来ていない場合が多かったように感じ、仮説が立てづらかった。</p>
<p>・難しかったが最初に意見をたくさん出したことで班の結束力が高まったように思う。</p>
<p>・強み、弱み、脅威、機会の4つに分類する作業がとても難しかった。と言うのも、それぞれの違いがよくわからなかったからだった。全体で説明されたあと、グループ単位で丁寧に説明して下さったので、それ以降は作業がはかどった。</p>

- ・計画を立てる際に有効な手段だと思いました。看護計画にも使わせてもらいました。
- ・自らの学んできたこと、知識を別地域の問題への解決の糸口として使うことができたことは嬉しく思った。しかし、まだまだ学ぶことがたくさんあるということは以前から分かっていたが、何が足りないか、といったことをグループのメンバーとの話し合いの中で具体的に知る機会になったのでよかった。



○「ワールドカフェ」に関する参加者の声(一部抜粋)

- ・人それぞれの対策を知ることができ、考え方の幅が広がった。
- ・発表についてワールドカフェで院生の方とやりとりさせていただきましたがとてもいい議論の場に使わせていただきました。時間が押していた関係で短かったことが残念です。
- ・他のグループから客観的なアドバイスをいただけて、発表内容をブラッシュアップできました。
- ・同じ課題に取り組む上で、違った考え方を聞いたり、似たような案から参考にさせてもらったりと、さまざまな視点の可能性を学ぶことができた。
- ・大まかな方針が決まってそこから他の意見をいただいて詰めていけるプログラムでとても楽しかったです。
- ・話題が難しかったことも加えて、班によっては全く違う視点で解決方法を出していて、おもしろいと思いました。
- ・途中で各班の状況を知れたり、意見交換ができたのは最終的な発表にとっても参考になったのでよかったです。時間がもう少し欲しかったと思いました。

<ul style="list-style-type: none"> ・一番楽しかった。刺激を受けた。
<ul style="list-style-type: none"> ・学生の想像力で出来上がっている企画なので、完成度はそれほど高くない。それを交流しても得られるものは少なかった。企画づくりに取り掛かる前にデータ分析に時間を掛けられるようにしなければならない。
<ul style="list-style-type: none"> ・他グループの意見を聞くことによって、考え方が広がる良い機会だと思いました。
<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの方の地域の問題など、たくさん勉強になる話が聞け、為になったが、自分があまり知識がないので足を引っ張る感じになってしまいました。
<ul style="list-style-type: none"> ・案を作り出すまでとても大変でしたが、このようなことは社会に出ても役立つと思うので良い機会になったと思いました。
<ul style="list-style-type: none"> ・ワールドカフェというより、全体発表の代表を決める段階での感想ですが。代表の決め方が、「良いと思ったグループに投票してください」というのはいかがなものでしょうか。個人によって「良い」の価値観は異なります。「独創性」「実現可能性」「課題に対して適切な提案となっているか」など、共通の評価項目を設けて、それに基づいた客観的な判断で投票を行うべきであると感じました。発表の後、質疑応答の時間が無いことも残念でした。
<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの話は視点が異なって新たな発見があった。

2-2-4. 総括

【LINKtopos 2017 学生委員 大阪府立大学 マネジメント学類4年 右 大輝】

今年度のワークショップ（以下、WS）の内容は概要にも記述した通り、開催地・大阪の地域課題にフォーカスし、よりリアルで現実味のある解決策を練ることを主題に掲げた、「地域課題解決ワーク」であった。LINKtopos のメインコンテンツである WS であるが、例年メインファシリテーター1人が100名弱の参加者を導くという形をとっていた。今年度は、ファシリテーターの負担を軽減すべく、複数ファシリテーターを導入したが、この制度自体は成功だったのではないかと考える。各テーマにファシリテーターとなる学生委員が1名つき、さらに全体ファシリテーターを置くことにより、ミクロとマクロの両面から参加者へのファシリテートができていたように感じた。

内容に関しては、今年度初めての試みとして外部の専門家をお呼びし、学びの時間と称したインプットを設け、参加者のマインドセットと知識の均一化を図った。参加者の声にもあるように、専門家の意見を聞くことは学生にとって非常に良い経験になったようだ。

一方で、内容を開催地「大阪」に特化したため、自分の所属する地域との関連性が持てず、普段の活動とどのように関連付けて思考するのかわからないまま WS を終えてしまった参加者も見受けられた。このことは、学生運営委員でも問題点に挙げており、ファシリテーションの中で解決していこうと考えていたのだが、結果、参加者に対して自地域と「大阪」の関連、問題解決を図るプロセス、多様なアプローチを得てほしいという目的が果たせなかった。

目的を意識したファシリテーションが取れていなかったことは反省点である。

次に、分析手法として提示した SWOT 分析についてであるが、こちらも賛否両論であり、新しい分析方法を知ることができ良かったという意見と、慣れていない参加者が多く、他の分析方法を用いたほうが良いのではないかという意見が出ていた。意見が割れてしまった原因の一つは、SWOT 分析の説明が甘かったと反省している。参加者が SWOT 分析に慣れていないのは既知の事実であり、もう少し時間をとってわかりやすい例を示したり、練習時間をとっていただければ参加者の理解が深まったと思われる。次年度以降も新しい分析方法を取り入れることは参加者の刺激になるであろうが、説明に関しては注意すべきである。

ワールドカフェは例年通り、好評であり、今後も続けていくべきものであろう。参加者からは、「違った意見を聞くことができ刺激を受けられた。」という声が多く見受けられ、LINKtopos の良さを出せているコンテンツになっている。

今回の WS をまとめると、新しく取り入れた複数ファシリテーター、専門家の意見を聞く、新しい手法を提示するという 3 点は参加者の満足度を高められる要因になったように思われる。ただし、そのどれも成熟しておらず参加者に不満を与えた面もあった。次年度以降これら手法に磨きをかけ、LINKtopos の WS がさらに良いものになって行くことを願う。

2-3. 大会3日目について

2-3-1. ダイアログ①について

2-3-1-1. ダイアログ① 概要

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4年 前田 謙】

○プログラム設定の背景

ダイアログ①では、参加者の所属大学に応じて、参加者を6つの地区ブロック（北海道・東北／関東・甲信越／東海・北陸／近畿／中国・四国／九州・沖縄）に分け、近隣大学間でのネットワーク構築を図った。全国の公立大学に所属する学生・教職員が一堂に会する、という位置付けであるLINKtoposではあるが、その開催頻度は現状、1年に1度であり、言わば「突発的な一過性のイベント」という要素も少なからず孕んでいると考える。そのため、「まずは地区別での連携を強化し近隣大学間でのネットワークを定期的に活用していくことで、年に1度の全国大会もより意義深いものになるのではないか」という意図のもと、昨年度から大会最終日に地区ブロック別での議論の場を設定している。

○目的・意図

1. 地区ブロック内でのネットワーク構築のためのきっかけを設定する。
2. 学生・教職員間での定期的な情報交換を促進する。
3. 次年度以降の学生委員及び、各地区の世話役の学生や教職員を発掘する。

○手法

- ・参加者の所属大学に応じて、参加者を6つの地区ブロック（北海道・東北／関東・甲信越／東海・北陸／近畿／中国・四国／九州・沖縄）に分ける。
- ・学生委員が各ブロックのファシリテーターとなり、今大会のふりかえりや、当該地区ブロック内でできることについて意見交換する。
- ・各地区ブロックで出た意見やアイデアを、参加者全員で共有する。



2-3-1-2. 参加者の声

・ 地区別 LINKtopos 開催に向け、大学間の連携を深めるとても良いプログラムだと思いました。今後が楽しみです。
・ みんなが感じていること、地方での LINKtopos を開催したいという学生の熱を直接言葉を通して感じる事ができて良かったです。
・ 各地域で LINKtopos をつくれるように地域ごとに集まるのはよいことだと思うが、建設的な話までは発展しなかったのもっと対話がしやすい場づくりが必要だと思う。
・ 地域の結束感を感じる事が出来た。また参加することで、自らの大学に対する LINKtopos への課題を見つける事が出来たので、持ち帰り、改善に努めたい。
・ 全国もそうだけれど、やはり各地域での活動が基になって全国に広がっていくと思うので、最後の振り返りで「各地域での活動もしたい」という声が上がったのがすごく嬉しかったし、自分も積極的に参加したいと思った。
・ みんな熱かったです。近畿 LINKtopos でまた会えるのを楽しみにしています！
・ 地域ごとの繋がりを強化したいのであれば、初日に一度地域ごとに集まりを設けて LINKtopos での目標を語るなどしておくほうが、良かった。3日目になってはじめて、地域ごとに集まることに違和感を感じた。

2-3-1-3. 総括

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4年 前田 謙】

地区別及び隣接公立大学間での連携促進のために、昨年度から「地区別でふりかえる時間」をプログラムに組み込んでいる。また、宿泊部屋も地区別にグルーピングし、参加者の熱量が、年に1度で開催される全国大会である LINKtopos のみで完結させないよう、プログラムの随所に地区別での関係性構築のための糸口を設定した。

今年度は昨年度よりも長い時間をかけて「地区別」の時間を設け、参加者自身による発話の促進を図った。地区によっては積極的に発言し、終始議論が盛り上がったうえ、地区別 LINKtopos の開催時期の見通しが立てられている地区もあった。他方で、思いのほか議論が盛り上がりず、ファシリテーターとして各地区に配置した学生委員の問いかけに答えるだけというような地区もあった。このような点では、例年にも見られるような「地区によって盛り上がり方に偏りがある」という課題を完全には克服できなかった。いずれにしても、地区別及び隣接公立大学間での連携促進のためには、LINKtopos のみならず日常的な情報交換などによる地道な取り組みが必要不可欠であると感じた。

評価できる点としては、「次年度以降の LINKtopos を担っていく人財（学生・カウンター

パートとなる教職員)」が各地区から発現したことである。相変わらず、当該年度 LINKtopos の終了時点で、次年度の LINKtopos 開催校が決定していないとはいえ、「地区別 LINKtopos」や「学内 LINKtopos」を実施していくうえで、キーパーソンとなる人物を発掘できたことは、例年の LINKtopos に係る組織体制、支援体制と比較すると大変有意義であったと考える。

2-3-2. 学生・学長合同セッション及びランチ交流会について

2-3-2-1. 学生・学長合同セッション及びランチ交流会 概要

【LINKtopos 2017 学生委員 大阪府立大学 マネジメント学類4年 右 大輝】

○プログラム設定の背景

学生・学長合同セッション及びランチ交流会はポスターセッションを行った後、学長と学生が同じテーブルに座り、昼食をとるというものである。昼食のテーブルは地区ごと、大学ごとで場所が決められている。

昼食中、学生は普段の活動の話や、学生生活を学長に話すことができ、学長は学生の生の意見を聞くことができる。これは普段大学で生活をしているだけでは決して得ることのできない貴重な時間であり、学生にとっても学長にとっても有意義な時間になっている。昼食の後、学生が学長会議に参加し、京都市立芸術大学学長鷺田清一先生の基調講演を聴講し、学生代表の前田がLINKtoposの意義を再度学長に訴えた。学長と学生が同じ時を過ごす、合同セッションの時間をとるために、例年LINKtoposを学長会議と場所、時間を同じになるように設定しており、このコンテンツが持つ重要性は何事にも代えられないものである。

○目的・意図

1. ポスターセッションによって普段の活動の振り返りと意見交換を促す。
2. 学生が普段の生活では関われない学長と直接活動の話をするにより、モチベーションを高める。また、学長が、自大学の学生が行っている活動を知ることによって学生への理解を深める。
3. 近隣地域の学長・学生とつながることで、地域の大学・学生同士の結束を高める。

○手法

- ・地区別にポスターを掲示し、発表の時間を設ける。
- ・学長と学生が同じテーブルで食事をする場を設ける。



2-3-2-2. 学生・学長合同シンポジウムについて

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4年 前田 謙】

大会参加者はランチ交流会の後、引き続き「平成 29 年度 第 1 回学長会議」の場にも同席し、会議の冒頭プログラムにも参加した。学長会議の場に、参加教職員のみならず、学生たちも同席し議論に参加できるという貴重な機会は、まさに「公立大学ならではの特徴」となっている。

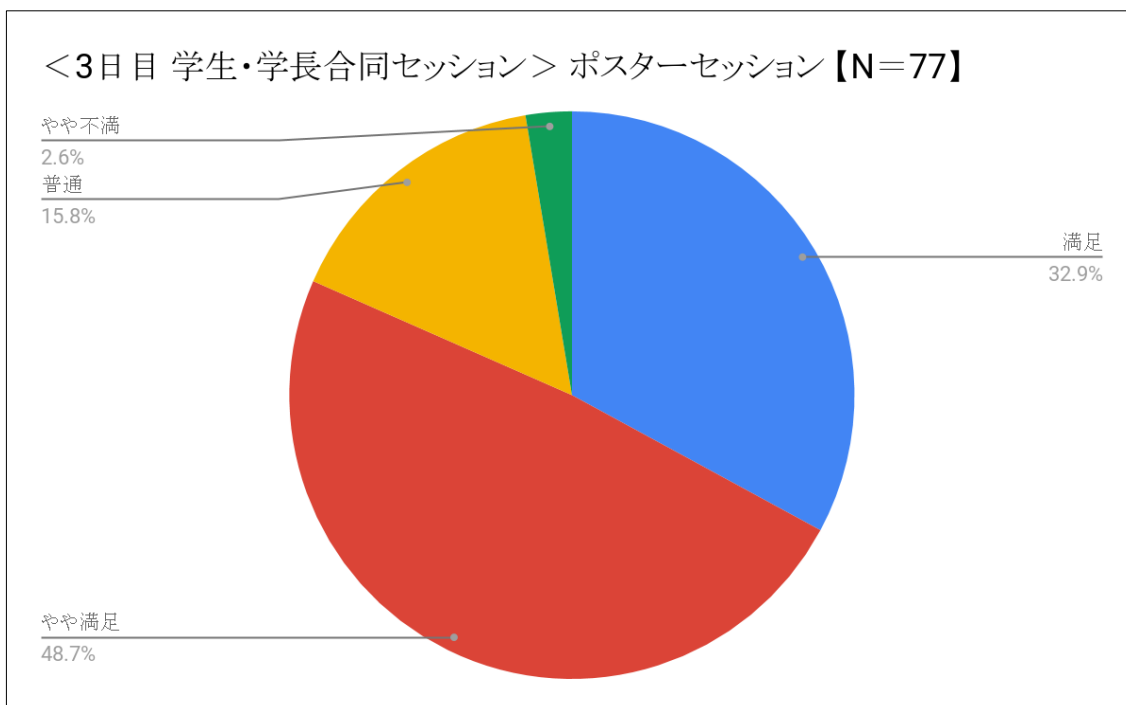
今年度はまず基調講演として、鷺田清一京都市立芸術大学長より、公立大学生へのメッセージを頂いた。普段はなかなか聴くことのできない鷺田先生のお話には、参加者たちの真剣な眼差しが感じられた。とりわけ、基調講演の話題としても取り上げられた「ヨソ者・若者・馬鹿者」にも該当する公立大学生が、大会後に各所属大学や活動地域において活躍していくための非常に有意義な時間となった。

その後、平成 29 年度 LINKtopos 学生代表である前田（北九州市立大学 4年）より、今年度大会の報告を行った。3 日間に及ぶ大会期間中にどのような想いを持って、どのようなプログラムを実施したかの報告はもちろんのこと、東日本大震災を契機にスタートした本ネットワーク及び学生大会実施に至るきっかけについても、ご出席の学長に向けて紹介した。さらには学長・教職員・学生・大学・地域が一体となった、公立大学ならではの連携体制を強化するとともに、特に地方都市で顕著な地域課題に対し積極的に寄与するためにも、より一層「公立大学としてのプレゼンス」を高めていくべきであるという提言も行った。会場内の学長や参加学生からも質疑応答が積極的に展開されるなど、徐々に LINKtopos そのものが全国の公立大学長に浸透してきているという実感を得ることが出来た。

このように、学生・学長合同シンポジウムを通して、学長と学生・教職員が一堂に会し、議論を交えながら、1つの方向に向かっていく姿勢は何物にも代えがたい貴重な機会であると考え。次年度以降も大切な「公立大学の特徴」として維持していくべきであると考え。



2-3-2-3. 事後アンケート結果／参加者の声



○参加者の声（一部抜粋）

<p>・ 時間と場所の確保が難しかったとは思いますが、もう少し想定していても良かったのかなと思います。（とくに場所の指示で時間をとられ発表時間が減ったことなど）ただ、ポスターセッションを通じて他大学の学長や職員さんと意見交換、名刺交換させていただき、質問を通じて様々な長所・短所に気づく機会になりました。もっと時間が欲しかったです。</p>
<p>・ 分科会では出来なかった深い質問が出来たので、とても参考になりました。時間をもう少し取って頂けるとありがたいです。</p>
<p>・ ポスターセッションでは、多くの人に自分達の活動を紹介できてよかったが、もっと時間が欲しかった。ランチ交流では、地域をバラバラにして席を決めたほうがよかったのではないかと思った。</p>
<p>・ 学生や学長さんに自分の活動している団体のことを知っていただけてまた、自分達の抱えている問題についても考え直せるいい機会になりました。</p>
<p>・ 各大学の取り組みを当該大学の学生に直接質問しながら学べるポスターセッションはとてもよいプログラムだと思う。しかし、尺が短く、多くを見て回れなかった。得られるものが少ない2日目のグループワークよりも、互いの活動の交流という本来の目的に合うポスターセッションにこそ時間を割くべきだ。鷲田清一先生のお話は大変身になったので、次回以降も学生の指針となるようなお話が期待できる方をお招きするのが良いと思う。</p>
<p>・ ポスターセッションと初日の分科会は同じものという認識でやっていたので、目的などの情報共有が不足していたのでは。同じようなものであれば同じ時間でやってじっくりできると思う。違うのであれば初参加の人でもわかりやすいように情報伝達してほしい。</p>

<p>・学長の方や、学生に自分たちの活動を知ってもらい、また興味を持っていただくことができたので、自分たちのこれからの活動への意欲が湧いた。他団体の、活動を詳しく知ることができ、相互に協力し合えそうな内容もあったため、その点でも得るものは多かった。学長さんとのランチ交流会は非常に貴重で、楽しいものだった。</p>
<p>・ポスターセッションに関しては、全体的に窮屈な印象を受けた。また、地域ごとではなくテーマごとにポスターを配置することで、見やすくなるのではないか。例えば文科会のように学内協働、地域での活動(ハード、ソフト)などでわけるといいかもしれない。ポスターセッションの時間がもう少し欲しかった。学長とのランチセッションは、各大学の学生と学長の交流を目的にしているのか、他大学の学長との交流を目的にしているのかが気になった。それに合わせて、席を配置すべきだったと思う。</p>
<p>・ポスターセッションの時間が短かったように思います。一人や二人だけで参加している大学もあったので、発表時間を 大学ごとに前半後半と分けてほしかったです。分科会では聞けなかった他大学の活動をきちんと知る時間が取れず、残念でした。</p>

2-3-2-4. 総括

【LINKtopos 2017 学生委員 大阪府立大学 マネジメント学類4年 右 大輝】

例年、ポスターセッションの時間が少ないという声が出る。その解決策として、今年度は1日目に分科会を開き、事前にそれぞれの大学の活動を知ってもらおうと試みたが、分科会が予定通り進まなかったことでその目的は達成されなかった。よって、今年度もポスターセッションの時間が少ないという声が出てしまった。現状のスケジュールでは、3日目に取れるポスターセッションの時間は物理的に精一杯のため、次年度以降は、1日目、2日目で参加者同士がお互いの活動を知ることができるコンテンツを組み込むことを課題とすべきだと感じた。

ランチ交流会では、自大学の学長が学長会議に参加していない学生がおり、学長に向けて再度学長セッションの意義について周知しなければならなかったと感じた。一方で、例年では見られなかった感想に、自大学の学長とは話す機会があるので他大学の学長と話したいというものがあり、学長と学生の垣根がなくなってきている大学が増えてきたことを知り、喜びを感じた。

学長会議では、学生と学長が入り混じって席に座っていた。これは今年度初めて見られた光景であり、例年は学長と学生ではっきりと座る場所が分かれていた。LINKtopos が学長会議にも浸透してきていると感じた。学長会議の場に学生が参加できることは決して当たり前のことではなく、学生の参加を認めて下さる諸先生方に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

2-3-3. ダイアログ②について

2-3-3-1. ダイアログ② 概要

【LINKtopos 2017 学生委員 大阪府立大学 マネジメント学類4年 右 大輝】

○プログラム設定の背景

昨年度参加者から、地区別での振り返りとは別に大学単位での振り返りの時間をとってほしいという声が出ていたので、今年度は、昨年度の地区別振り返りに加えて大学別振り返りの時間を設けた。

また、クロージングムービーを流し、個人単位で3日間の振り返りも促した。

○目的

振り返りの時間を何度も取り、色々な人と意見交換をしてもらうことで、LINKtopos で得た学びをさらに強固なものにしてほしいという狙いがある。

大学別で振り返ってもらうことで、活動に活かせる気づきを共有することはもちろん、大学内LINKtopos へのきっかけが生まれることを期待している。

また、クロージングムービーは5分程度のものであるが、3日間の写真とムービーをダイジェストで流し、個人内部での3日間の振り返りを促した。ムービーを見ながら、改めて3日間で得た気づきと刺激を確認してもらうことを目的としている。

○手法

- ・クロージングの会場に、大学別で座ってもらい、意見交換しやすい状態にする。
- ・1人で来ている参加者には、運営委員が気づきの共有相手に入る。
- ・クロージングムービーを流す。



2-3-3-2. 参加者の声

○参加者の声（一部抜粋）

・ 地区別 LINKtopos 開催に向け、大学間の連携を深める大変良いプログラムだと思いました。
・ みんなが感じていること、地方での LINKtopos を開催したいという学生の熱を直接言葉を通して感じる事ができて良かったです。
・ 各地域で LINKtopos をつくれるように地域ごとに集まるのはよいことだと思うが、建設的な話までは発展しなかったのもっと対話がしやすい場づくりが必要だと思う。自大学の学生間で3日間の感想を交流する機会をもてたことは、自分と違う感想を知ることができて、ためになった。
・ 鷲田先生のお話がとても為になる話だと思いました。命の世話に関しては特に、わたしの学んでいることに活かそうだと感じました。また、鷲田先生の本を高校生の頃に読んだことがあったので、実際にお話を聞くことができ嬉しかったです。
・ 地域の結束感を感じることが出来た。参加することで、自らの大学に対する LINKtopos への課題を見つけることが出来たので、持ち帰り、改善に努めたい。全国もそうだけれど、やはり各地域での活動が基になって全国に広がっていくと思うので、最後の振り返りで「各地域での活動もしたい」という声が上がったのがすごく嬉しかったし、自分も積極的に参加したいと思った。
・ 地域ごとの繋がりを強化したいのであれば、初日に一度地域ごとに集まりを設けて LINKtopos での目標を語るなどしておくほうが、良かった。3日目になってはじめて、地域ごとに集まることに違和感を感じた。

2-3-3-3. 総括

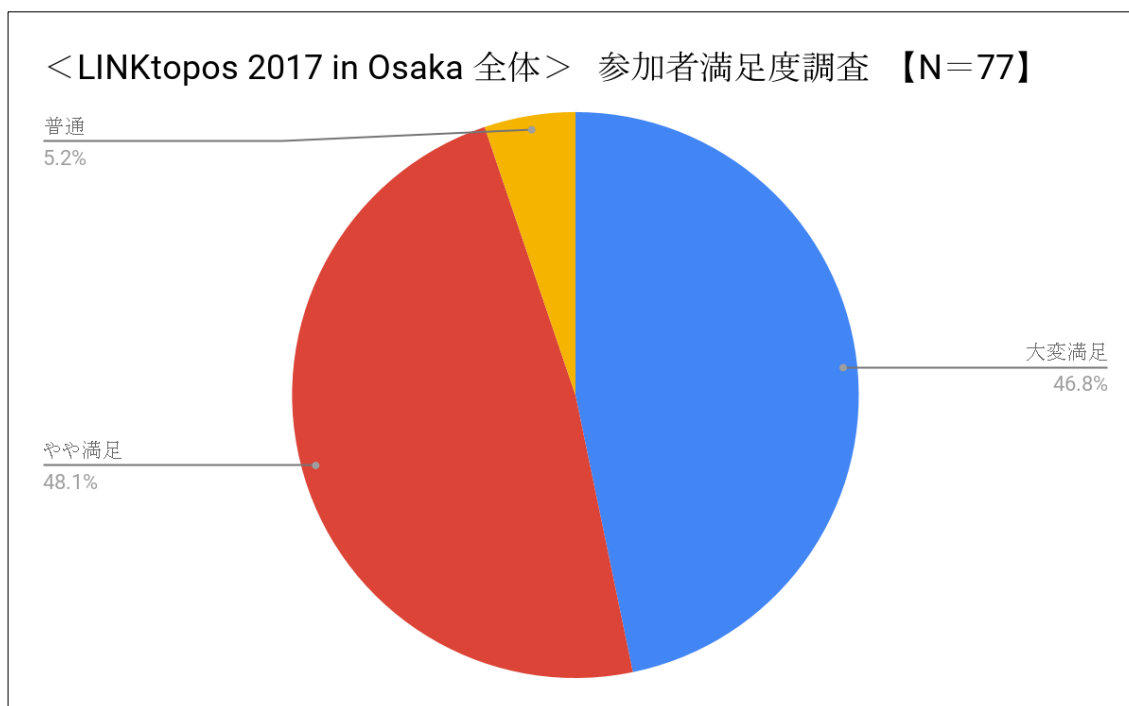
【LINKtopos 2017 学生委員 大阪府立大学 マネジメント学類 4年 右 大輝】

前述の通り、例年の LINKtopos における最大の課題点は「熱量が持続しないこと」であった。もちろん、大会そのものの満足度も大いに影響しているが、それに加えて、自大学・自団体に戻った後、内部での連携構築が上手く出来ていないこともその一因であったように感じる。今年度の新たな取り組みとして、少しでも“熱”が冷めないうちに内部での情報共有を促すことで、参加者の所属大学内での学生間・学生教職員間での意思疎通が活発になればと思う。

しかしながら、やはりこの取り組みを実施する上でも時間的制約が合った上、個人参加の学生へのフォローも思うようにできなかったことは次年度以降の課題として挙げられる。LINKtopos への参加を契機に、全国の公立大学関係者と出逢い、多種多様な価値観に触れた経験を、大会期間中の3日間に留めるのではなく、何気ない日常の中にも組み込んでいくような試行錯誤は、今後も継続的に進めていくべきであると考えます。

3. 大会全体を通して

3-1. LINKtopos 2017 総合アンケート結果／参加者の声



○参加者の声（一部抜粋）

・とても内容の濃い三日間でとても満足しています。来年も後輩を連れてこの繋がりが途切れないようにしていきたいと思います。中四国地方LINKtoposをしたいという気持ちのある学生がいること、案として出ていたことを学校サイドには伝えましたので、動きがあるかは分かりませんが、何か動きがあれば力を貸していただければと思います。

・2日間の参加でしたが本当にお世話になりました。教授から声をかけていただくまでこのような活動があることを全く知らず、自分の大学で周知が全く足りていないことを痛感致しました。今回私の大学から参加したのは、教授や学生委員からのお誘いで参加したメンバーばかりでしたが、今後は自主的に申し込む学生やボランティアサークルに参加してもらえるような広報宣伝が必要だと思いました。全国の公立大学の活動から刺激を受けるめったにない機会を、これからも続けていってほしいと思います。2日間ありがとうございました。

・とっても濃い3日間でした。普段では絶対に経験できないようなことが出来て、とても勉強になりました。ありがとうございました。

・とっても充実した時間になりました。歴史が浅い分、これからみんながやりたいことを盛り込めると思います。たくさんの意見を反映させてより盛り上がることを応援しています。

<p>・せっかく全国各地で開催しているので、その土地の美味しい食べ物などを皆で食べる時間などももうけた方が、もっと楽しめるのではないかと感じた。</p>
<p>・3日間、詰め込まれたスケジュールの中充実して過ごすことが出来ました。もっと時間があれば、と思う事も多かったです、が仲間と協力して取り組むことができ、とても貴重な時間であり、空間でした。3日間ありがとうございました、お疲れ様でした。陰ながら、次回以降も期待しております。</p>
<p>・個人的に宿泊部屋は近い地区で集まる必要はなかったように感じた。むしろ地区が全く違う方が地域性や考え方も違うので盛り上がるのではないかと思った。また、自然の家から降りる途中がカーブが多く、車酔いした学生が多くいた。特に補助席に座った学生は本当に気分が悪そうだったため、薬を持ってくるように呼びかけるか、途中で一旦休憩を取るかした方が良かったように思う。</p>
<p>・LINKtoposは、全国の学生と知り合えることがいいところである。しかし、LINKtoposを通して、自分が成長できたのか、今後の活動に活かせるかを考えるとそれは出来ていないと思った。厳しい意見になってしまいとても申し訳ないが、初めて参加する人にとってはいいかもしれない。ただ、ポスターセッションでも文科会の発表でも活動の課題を共有したところで、他の団体も同じ課題を抱えていることの共有にとどまってしまい、解決には結びついていないこと、同じような考えしか出てこなかったことが残念でした。課題を解決することは難しいことかもしれないが、解決できた例の発表もあると問題への対応の仕方なども学べてとてもよい会になると思いました。成長という観点から考えると、ワークショップが楽しくてワークショップ中毒になる人もたまにいますので、それは防がなければならない。折角行ったワークショップを自分の身の丈に落とす作業があるといいかもしれない。</p>
<p>・2年連続参加させていただき、とても楽しく、充実した3日間を過ごすことが出来ました。昨年と同様とても刺激を受け、さらにやる気も高っております。ただ、昨年と違うのは学年が上がり、活動に対する責任感が増すと同時に団体として今のままでいいのか、本当に地域の為になっているのかという不安感を抱き自信を持ってないことが、多くなったということです。しかし、LINKtoposで活動を紹介し、色々な分野の方々からプラスの声やアドバイスをいただけたことで、忘れていた初心を思い出すことが出来き、もっと自信を持って、団体をよくしていきたいと思うことが出来ました。全国の公立大生と繋がる事が出来るこの場は本当になくしてはならないと改めて感じました。</p>

3-2. 全体総括

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4年 前田 謙】

「公立大学学生ネットワーク」ならびに全国大会である「LINKtopos」が発足して、今年で5年目を迎える。すなわち、多くの大学生が学部課程に入学し、修了する年月とも合致する。この点において、「LINKtopos 創成期の学生全員が大学を卒業した最初の大会」が今大会であった。大学生のみならず、どんな組織においても、ひとが変われば「ノウハウの継承」や「意志伝達」が比較的困難になるという点は否めない。そこで今年度の大会運営に携わる学生（以下、学生委員）に声をかけ、全国から15名程度の学生の協力を仰ぎながら、「LINKtopos とは何なのか」「LINKtopos の意義は何か」「LINKtopos は本当に必要なのか」というような根本的な問いを立てることから始めた。同時に、過去大会で学生委員が「課題」と感じた点は、今大会で積極的に改善するように努め、組織体制や運営手法そのものの改革にも着手することが出来た。

また今年度は、「LINKtopos としてのネクストステージ」を目指したがゆえに、これまでは取り組んでこなかったこと〔1日目：分科会形式での活動紹介／2日目：開催地域の地域課題にフォーカスし、解決・改善への糸口を探る／ワークショップを複数の学生委員でファシリテートする／3日目：地区ブロックごとの振り返りに加え、各大学別での振り返りの時間を設けた等〕にチャレンジしたため、参加学生・教職員のなかにも賛否両論あるのではないだろうか。ゆえに、次年度以降に向けて、新たな運営課題も浮き彫りとなってしまったと感じている。

上記のような目標を掲げながらも、「LINKtopos 2017 in Osaka」は、全国の公立大学から集結した学生・教職員の目にどう映り、自大学に帰った後、いま現在どのような活動に活かされているのだろうか。LINKtopos 2017 では3日間を通して、普段の何気ない大学での生活では出逢うことのないひとと出逢い、多様な価値観やモノの見方に触れることで、「私・私たちが普段何をしているのか」「どこを目指して活動しているのか」をいま一度振り返る機会にしてほしいという願いのもと、「Discover Ourselves ～地域と出逢い、私と出逢う～」という大会テーマを掲げた。

今大会の参加者が所属する全国の公立大学においても、いまいちど「地域」へのまなざしや「地域活動」への意識を、学生のみならず、学生と教職員、そして地域住民が一体となって見直す必要があると感じる。加えて、公立大学としてのプレゼンスを高め、近年、声高に取り沙汰されている「人口減少のためのダム機能」を果たすことが出来るポテンシャルを持つ公立大学であるがゆえに、「井の中の蛙」にならないように留意しなければならないと強く感じる。このような観点からも、LINKtopos という仕組みそのものが、より地区ブロックにも根付き、学部・学科や日頃の地域活動での専門性の垣根を超えた範疇で展開され、ますます発展していくことを望む。

4. 次年度開催に向けて

4-1. LINKtopos 2018 学生委員組織体制 (平成30年1月現在)

※ Web掲載版では省略

OLINKtopos 2018 開催日及び開催地 (予定)

- ・開催日：平成30年10月6日(土)～8日(月・祝)
- ・開催場所：静岡県立焼津青少年の家／静岡県立大学

4-2. 学内 LINKtopos／地区別 LINKtopos の開催に向けて

すでに前述の通り、1年に1度の全国大会である LINKtopos は、文字通り全国の公立大学に所属する学生・教職員が一堂に会し、3日間をかけてネットワークを形成しながら、地域課題の改善や解決に向けたワークショップを行い、参加学生自らが学長に日頃の活動を紹介することで、非常に意義深い「公立大学の特徴」となっている。その一方で、LINKtopos が開催される3日間のみでの圧倒的な熱量が、大会後に所属大学に戻ったのち、持続されないという長年の課題が残存していることは否めない。

このような長年の課題を解決させていくための手段として、「学内 LINKtopos」が挙げられる。所属大学内での、学生・教職員の協働を目的にすでに複数の大学で開催されており、企画・運営が学生の手によって行われている。

加えて、近隣大学間の連携を促進するために、ここ数年、公立大学学生ネットワークで注力しているのが「地区別 LINKtopos」である。全国の公立大学生・教職員との出逢いがある LINKtopos への参加を契機とし、地区別 LINKtopos を開催することで、活動に関する相互の情報交換や、地区内での新たなネットワーク形成に大きく寄与している。地区別 LINKtopos に参加したことで、全国版の LINKtopos の存在を知り、翌年の全国版 LINKtopos に参加した学生・教職員も少なくない。

○学内 LINKtopos／地区別 LINKtopos 開催状況（平成28年10月～平成29年12月現在）

地区	開催状況
北海道・東北 地区	<p><学内 LINKtopos></p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催日：平成28年12月19日 開催校：岩手県立大学 ・開催日：平成29年11月16日 開催校：岩手県立大学 ・開催日：平成29年11月26日 開催校：青森県立保健大学 ・開催日：平成29年11月29日 開催校：秋田県立大学 ・開催日：平成29年12月12日 開催校：岩手県立大学 <p><地区別 LINKtopos></p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催日：平成29年3月25日 開催地：青森県立保健大学 <p>参加大学：青森県立大学、岩手県立大学 参加者数：学生11名、教員1名</p>
関東・甲信越 地区	<p><学内 LINKtopos></p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催日：平成28年11月 開催校：高崎経済大学
東海・北陸 地区	<p><学内 LINKtopos></p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催日：平成28年12月16日 開催校：名古屋市立大学

	<ul style="list-style-type: none"> 開催日：平成 29 年 11 月 17 日 開催校：名古屋市立大学 (※岐阜薬科大学の学生も参加。)
近畿地区	<p>< 地区別 LINKtopos ></p> <ul style="list-style-type: none"> 開催日：平成 29 年 2 月 21 日～22 日 開催地：大阪市立大学 参加大学：大阪市立大学、大阪府立大学、兵庫県立大学、神戸市 看護大学、立命館大学、同志社大学 参加者数：学生 17 名
中国・四国 地区	<p>< 地区別 LINKtopos ></p> <ul style="list-style-type: none"> 開催日：平成 28 年 11 月 16 日 開催校：高知県立大学 参加大学：高知県立大学、高知工科大学、高知短期大学 参加者数：約 50 名 (学生・教職員)
九州・沖縄 地区	<p>< 地区別 LINKtopos ></p> <ul style="list-style-type: none"> 開催日：平成 28 年 12 月 4 日 開催地：天神仕事基地 (福岡県福岡市) 参加大学：北九州市立大学、九州歯科大学、熊本県立大学、九州大 学 参加者数：学生 9 名 開催日：平成 28 年 12 月 29 日 開催地：北九州まなびと ESD ステーション 参加大学：北九州市立大学、九州歯科大学、熊本県立大学、高知大 学、東北大学 参加者数：学生 12 名

4-3. 展望

【LINKtopos 2017 学生委員 北九州市立大学 文学部 4 年 前田 謙】

今年度で 5 回目を迎える LINKtopos であるが、参加者数をみると年々増加傾向にある。しかし、参加大学の伸び率との比例関係はあまり見られない。また、例年は多数の参加者がいる大学からの参加が、今年はあまりなかった。こうした「LINKtopos 常連校」の今大会への不参加の背景としては、大学行事との日程重複が挙げられているという。

さらに、参加者の属性については、学部 1 年生及び学部 2 年生と学部 3 年生が全体参加者の 7 割強を占めていたことは、LINKtopos そのものの将来的な持続性の観点から非常に望ましい数字となった。一方で、複数年にわたって LINKtopos に参加している参加者は全体の

1割程度にとどまり、LINKtoposの理念や設立の背景などの継承には工夫が必要であると考えられる。また、「学生と教職員の協働」という観点では、教職員の参加者数も促進させる必要がある。某大学では「新任職員の研修の一環」としてLINKtoposへの参加が設定されているため、毎年確実に一定数の職員がLINKtoposに参加し、学内にLINKtoposの意志を継承し、周知する人材が増えているそうである。LINKtoposの意義の重要な部分でもある「学生と教職員の協働」という観点からみると、全体参加者に占める教職員参加者の割合が1割程度にとどまっていた点に関しては、教職員向けのプログラムの模索や学内外からの広報活動に注力しなければならない。

上記のような現状を打破し、これまでのような「ひと」依存の組織体制ではなく、LINKtoposに参加した一人でも多くの学生・教職員が、「所属大学内・地区内」での連携を強め、それぞれが自律していけるような仕組みづくりにも着手しなければならないと考える。このような動きを促進させていくうえでも、それぞれの公立大学内で確実にLINKtoposに関わる情報を取り扱う部門が設置され、かつ、LINKtoposを経験した学生・教職員が学内や地区内に旗印となって増えていくことを望む。「教職員との協働」を実現するためには、「公立大学の職員ネットワーク」との連携も模索していくべきではないだろうか。文字通り、LINKtoposは発火点であり、きっかけに過ぎないため、LINKtoposそのものがより浸透していくように今後も、地道な広報活動や、LINKtoposの意義の文字化・具現化、ブランディングが重要である。

5. 謝辞

平成29年度全国公立大学学生大会LINKtoposの開催に際して、ご指導・ご支援をいただきましたワーキンググループ委員の先生方、公大協事務局職員の皆様、「地域課題解決ワーク」に話題提供をいただきました皆さま、そして会場運営に協力して頂きました大阪市立大学の学生・教職員の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今年度で5年目となりました、大会も盛況のまま終わることができたのは、参加して下さった学生・教職員、そして学長の皆様のご協力とご理解があつてこそだと思っています。昨今の地域社会の目まぐるしい変化に伴い、地域社会及び公立大学の置かれる立場や、その存在意義に対しても見直す必要に迫られているように感じます。同時に、今や「公立大学の特徴」であるLINKtoposも創成期を経て次のステージへと突入しております。既存のシステムだけに固執するのではなく、地に足の着いた、公立大学ならではの柔軟性を発揮し、その可能性を最大限に引き出す機会がこのLINKtoposではないかと考えます。改めて、協力していただいた多くの皆様に対しまして心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げます。そして、今後とも公立大学及びLINKtoposの発展にご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年1月吉日

平成29年度 公立大学学生ネットワーク 代表 前田 謙(北九州市立大学 文学部4年)

補足資料①

平成 29 年度「公立大学の学生交流に関するワーキンググループ」について

公立大学の学生間の交流を促進するために、公立大学の学生交流に関するワーキンググループ（WG）が以下のとおり設置されている。

WG の役職	所属・役職	氏名(敬称略)
主査	高知県立大学 学長特別補佐・地域教育研究センター長	清原 泰治
副主査	名古屋市立大学 副学長	伊藤 恭彦
委員（北海道・東北地区）	札幌医科大学 医療人材育成センター長	相馬 仁
委員（関東・甲信越地区）	首都大学東京 学長補佐（学生担当）	永井 徹
委員（東海・北陸地区）	岐阜薬科大学 副学長	足立 哲夫
委員（近畿地区）	滋賀県立大学 地域連携担当理事・COC+推進室長	田端 克行
委員（中国・四国地区）	下関市立大学 経済学部 学部長	高橋 和幸
委員（九州・沖縄地区）	熊本県立大学 総合管理学部 教授	吉村 信明
委員（会場校）	大阪市立大学 学長補佐・地域連携センター所長	宮野 道雄
委員（公立大学協会）	公立大学協会 事務局長	中田 晃

補足資料②

LINKtopos 2017 学生委員について

LINKtopos 2017 in Osaka を開催するにあたり、全国の公立大学生の有志により企画・運営をはじめ、関係各所との調整を担った。昨年度の北九州大会の閉幕から間もなくして今大会の構想に着手し、今大会開催に至るまでの約1年間、毎月インターネット会議等にて議論を交わしてきた。生憎、構想段階から企画に携わった全ての学生が今大会当日に参加することは叶わなかったが、今大会の開催に対し多大なる貢献を果たしたことをここに記す。本報告書では、便宜上、大会当日の運営に携わった「当日学生委員」を以下の通り掲げる。

氏名	所属	主な役割
前田 謙	北九州市立大学 文学部4年	学生代表／全体マネジメント／「ダイアログ①」「ダイアログ②」全体ファシリテーター／学長会議報告 等
右 大輝	大阪府立大学 マネジメント学類4年	学生副代表／「地域課題解決型ワーク」全体ファシリテーター／「ダイアログ①；東海・北陸エリア」ファシリテーター 等
上田 光希	大阪市立大学 法学部4年	開催地事務局／「分科会；②地域活性」ファシリテーター／「地域課題解決型ワーク；④防災(減災)教育／災害復興」ファシリテーター／「ダイアログ①；近畿エリア」ファシリテーター 等
常岡 恵里奈	青森県立保健大学 健康科学部3年	「分科会；①福祉／災害／防犯」ファシリテーター／「ダイアログ①；北海道・東北エリア」ファシリテーター 等
水越 智一	首都大学東京 システムデザイン研究科 修士1年	「分科会；③学内協働」ファシリテーター／「地域課題解決型ワーク；③公立大学の地域貢献」ファシリテーター／「ダイアログ①；関東・甲信越エリア」ファシリテーター 等
島野 真帆	高知県立大学 文化学部4年	「分科会；②地域活性」ファシリテーター／「地域課題解決型ワーク；②地域再生／活性」ファシリテーター／「ダイアログ①；中国・四国エリア」ファシリテーター 等
大庭 亜美	北九州市立大学 地域創生学群4年	「分科会；①福祉／災害／防犯」ファシリテーター／「地域課題解決型ワーク；①地域福祉」ファシリテーター／「ダイアログ①；九州・沖縄エリア」ファシリテーター 等

